

1-5. 浜松の歴史と関わりのある主な人物

ここでは、浜松市の歴史と関わりのある人物のうち、本市の風景や建造物に関連する人物を取り上げ、その人物と関わりのある場所や施設を掲載する。

※生没年には推定年を含む。

表1-5-1 浜松の歴史と関わりのある主な人物

 <p>浜北人・根堅遺跡</p>	<p>はまきたじん 浜北人 18000 年前 旧石器時代</p>	<p>現存する本州最古の化石人骨。下層人骨は約 18000 年前、上層人骨は 14000 年前と推定。中央構造線の外帯に連なる古中世層のうちに発達した石灰岩の洞窟に暮らしていた。上層人骨は 20 歳代の女性、身長は 143 センチメートルと推定されている。</p>
 <p>三ヶ日人・只木遺跡</p>	<p>みっかびじん 三ヶ日人 8000 年前 縄文時代</p>	<p>石灰岩の岩陰で暮らしていた。当初の旧石器時代との学説が縄文時代早期に変更されたが、本州の希少な化石人骨として浜北人とともに同一市域から年代の異なる人骨が出土したことは貴重。成人男子で身長は 150 センチメートル前後と想像される。</p>
 <p>蜆塚遺跡出土人骨</p>	<p>しじみづかじん 蜆塚人 4000 年前 縄文時代</p>	<p>縄文時代後晩期の貝塚に埋葬されていた人骨。屈葬で貝の腕輪をした老人。市内では全身骨格がわかる最古の人物。身長は 150 センチメートル台。蜆塚遺跡は東海地方では最大級の貝塚で、国の史跡。遺跡公園に隣接して浜松市博物館がある。</p>
 <p>伊場遺跡公園</p>	<p>わかやまとべのむらじおいまる 若倭部連老末呂 699 年 飛鳥時代</p>	<p>古代の役所があった伊場遺跡から出土した木簡に記載された人名。名前のわかる市内では最古の人物。「<small>ふちの</small> 瀨<small>こおりたけだのきとひとわかやまとべのむらじおいまる</small> 評竹田里人若倭部連老末呂」とあり、役所に呼び出された召喚状らしい。このほかにも伊場木簡には古代の人名が複数見られる。</p>
 <p>古代長上郡・木船廃寺</p>	<p>たじひのきみのおびとまとめ 蝮王首真土売 726 年 奈良時代</p>	<p>山城国雲下里(現京都市)の住人蝮王首真土売以下、宅主売・宅売・姉売(4姉妹か)が、長田上郡(現浜松市中央区付近)にて暮らす。出雲臣の一族が天竜川下流にも拠点を置き、古代にも山陰や畿内はじめ広範囲の人的交流があったことを示す。</p>
 <p>宮口八幡神社万葉歌碑</p>	<p>わかやまとべのみまる 若倭部身麿 755 年 奈良時代</p>	<p>天平勝宝7年(755)、防人として筑紫に赴いた遠江国鹿玉郡の主帳丁。その時の歌、「わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず」が万葉集に採択された。また、万葉集には、ほかに遠江国長下郡の人物として、物部秋持、物部古麿がみえる。</p>

	<p>さかのうえたむらまろ 坂上田村麻呂 758～811 平安時代</p>	<p>征夷大將軍。陸奥の国の経営だけでなく、平安京でも活躍した官人。京都から蝦夷征伐に向かう途中、当地を經由しているのは確実だが、天竜川の洪水と大蛇に関わる有玉伝説(袖ヶ浦由来記)が有玉(中央区)や鹿島(天竜区)などを舞台に創作されている。</p>
	<p>たいりょう いしやま 大領 石山 9世紀 平安時代</p>	<p>伊場遺跡群のうち梶子北遺跡から出土した平安時代の木簡に署名がある。古代の遠江国のうち敷智郡(現浜松市中央区付近)の歴代長官(大領)のなかで、唯一名前が判明した人物となった。大領は官職名で、「石山」が自筆のサインにあたる。</p>
	<p>たちばなのはやなり 橘逸勢 ?～842 平安時代</p>	<p>平安時代の三筆(書の達人)のうちひとり、隸書をよくした。承和の変に連座し伊豆に配流される途中、遠江国板筑駅にて病死。浜名湖北側を通過したと類推される。死後許されて従四位下を追贈された。三筆の残りの二人は、空海と嵯峨天皇。</p>
	<p>すがわらのたかすえむすめ 菅原孝標女 1008～? 平安時代</p>	<p>菅原道真の家系につらなる。『更級日記』の作者。寛仁2年(1020)に父の任地だった上総から京に上るおり、天竜川のほとりに仮宿を建てた淋しい思い出など旅行の経験を記録していた。『更級日記』自体は、作者が後年に書き著したものの。</p>
	<p>さいぎょうほうし 西行法師 1118～1190 鎌倉時代</p>	<p>藤原一門・佐藤家の出身で、北面の武士として出仕、後に出家して全国を旅した歌人。松尾芭蕉らも含め、後代の歌人・俳人に大きな影響を残した。旅の途中、天竜川の渡りで、船に乗る順番でもめ事に巻き込まれて、けがをしたとの逸話がある。</p>
	<p>みなもとののりより 源範頼 ?～1193 平安時代末</p>	<p>源義朝の六男。源頼朝の異母弟。母は池田宿の遊女。蒲御厨で育ち、「蒲冠者」と呼ばれる。頼朝の挙兵に参集して平氏討伐に尽力したが、頼朝に疑われ、伊豆に幽閉されて殺害される。愛馬が範頼の首をくわえてこの地に戻ったと伝わる。居館跡南方に駒塚がある。</p>
	<p>あぶつに 阿仏尼 1222～1283 鎌倉時代</p>	<p>養父・平度繁(たいらののりしげ)に従い、一時、引間に暮らす。『うたたね』、『十六夜日記』を著して当時の浜松付近のようすを記す。『十六夜日記』には「今宵は引馬の宿といふ処に留まる、大方の名は浜松とぞ言ひし」などとある。引間宿は浜松八幡宮の門前にあつた。</p>
	<p>むねなが(むねよし)しんのう 宗良親王 1311～1385 南北朝時代</p>	<p>後醍醐天皇の皇子。父の意向を受けて南朝方の支援を得るため、遠江の井伊家をたより挙兵するが、高師泰ら北朝方の攻撃で1340年、南朝方拠点の三岳城、大平城が落城し、信濃に敗走した。上陸した白羽(別説あり)ほか市内各地にゆかりの地が残る。</p>

 <p>方広寺伽藍</p>	<p>むもんげんせん 無文元選 1323～1390 南北朝時代</p>	<p>後醍醐天皇の皇子、宗良親王の弟。京都建仁寺で出家し中国に留学したのち、井伊家の一門にあたる奥山氏の支援を得て、1384年、臨濟宗深奥山方広寺を開創した。室町時代にかけて禅僧を多く輩出している。方広寺は臨濟宗の本山のひとつ。</p>
 <p>普濟寺「東海僧堂」額</p>	<p>けぞうぎどん 華蔵義曇 1375～1455 室町時代</p>	<p>肥後国(現熊本県)大慈寺の禅僧。東海に曹洞宗を広めるため、当時の浜松荘領主・吉良氏の庇護を受けて隨縁寺を開いた。ついで普濟寺を開創して多くの弟子を育て、浜松南部から東三河にかけて教線を拡大した。普濟寺には「東海僧堂」の額がかかる。</p>
 <p>ざざんざの松石碑</p>	<p>あしかがよしのり 足利義教 1394～1441 室町時代</p>	<p>室町幕府六代将軍。永享4年(1432)、関東公方・足利持氏を牽制するため富士遊覧を挙行し、道中で従者とともに当地の歌を詠む。「浜松の音はざざんざ」。引間宿からざざんざの松(中央区八幡町)を眺め、東進して植松(中央区、匂坂(現磐田市))を経由したとみられる。</p>
 <p>普濟寺</p>	<p>ばんりしゅうく 万里集九 1428～? 室町時代</p>	<p>禅僧、歌人。文明17年(1485)、太田道灌の招きで関東に下る途中、引間にも滞在しこの地のようすを『梅花無尽蔵』に記した。「引間、市ハ富ミテ屋ハ千区(市場が盛んで町屋が千軒ある)」ほかの漢詩を詠んだ。普濟寺を訪問してぬかるみにはまったという記載もある。</p>
 <p>引間城跡</p>	<p>さいおくけんそうちょう 柴屋軒宗長 1448～1532 戦国時代</p>	<p>駿河国島田宿(静岡県島田市)出身の連歌師。今川家に仕え、引間城にも滞在した。当時の遠江の情勢を『宗長手記』などの記録にとどめ、斯波氏と今川氏の抗争などを詳しく表記している。また、当時の引間城主は飯尾善四郎だと記す。</p>
 <p>欠下城跡(大菩薩山)</p>	<p>ただだしんげん 武田信玄 1521～1573 戦国時代</p>	<p>甲斐の戦国大名。今川領の駿河に侵攻、遠江の領有をめぐる徳川家康と対立。三方ヶ原の戦い前後には、欠下城をはじめ現浜松市域中北部のほとんど(姫街道以北)を掌中にした。家康を浜松城に追い詰めるが、城は攻めずに西進、その進軍中に病没した。</p>
 <p>秀吉鎌砥池(頭陀寺町)</p>	<p>とよとみひでよし 豊臣秀吉 1537～1598 戦国時代</p>	<p>少年時代、尾張から出奔して頭陀寺の松下之綱に仕え、引間城にも同行する。のち帰郷して織田信長に仕えて頭角を現した。天下統一後は、徳川家康を東海の旧領から関東に移封し、自身の配下である堀尾吉晴を配すなど東海の諸城を一新した。</p>
 <p>松下屋敷跡</p>	<p>まつしたゆきつな 松下之綱 1537～1598 戦国時代</p>	<p>今川氏支配下の遠江で頭陀寺城主。放浪していた少年時代の豊臣秀吉を見出して一時は家臣とし、引間城主の飯尾氏にも面会させる。後年、天下人となった秀吉が之綱を家臣とし、遠江・久野城主に取り立てて、大名家に列する。</p>

	<p>とくがわいえやす 徳川家康 1542～1616 戦国時代</p>	<p>三河松平氏の嫡子、今川義元の人質として駿河にあり、桶狭間の戦い以後岡崎で独立。遠江に侵攻し、1570年から浜松を居城とする。浜松在城17年間のうちで、織田信長、ついで豊臣秀吉に従い、一介の戦国大名から天下のNo.2にまで出世する。</p>
	<p>りんごかん 林五官 16～17世紀 戦国時代</p>	<p>中国出身の商人・船乗り。天正2年(1574)暴風雨に遭って遠州灘沿岸の西島村(中央区)に漂着し、徳川家康に願い出て、浜松に永住した。家康の没年まで舟運をはじめとする物流を任され、また銅版活字の製作などにあたった。</p>
	<p>とくがわのぶやす 徳川信康(松平信康) 1559～1579 戦国時代</p>	<p>徳川家康の長男、家康が浜松に居城したときから岡崎城主をまかされる。しかし、家康が同盟していた織田信長に武田方との内通を疑われ、堀江城などを経て最後は二俣城に預けられて蟄居、切腹した。家康は供養のために清瀧寺を建立している。</p>
	<p>つきやまごぜん 築山御前 ?～1579 戦国時代</p>	<p>家康の正室で、信康の母。今川義元の姫だが、井伊家の血筋との説がある。武田方との内通が疑われた信康助命のために岡崎から家康のいる浜松城に向ったが、佐鳴湖畔の小藪で待ち構えていた家臣に殺害される。遺骸は西来院に葬られた。</p>
	<p>ゆうきひでやす 結城秀康 1574～1607 戦国時代</p>	<p>家康の次男、宇布見・中村家で誕生した。屋敷地内に胞衣塚がある。関ヶ原の戦い後、それまでの功績により越前国(福井県)68万石を拝領し、初代福井藩主となる。子孫は松平家に復姓し、出雲松平家など各家が存続する。</p>
	<p>とくがわひでただ 徳川秀忠 1579～1632 戦国時代</p>	<p>浜松城下で誕生した家康三男で、江戸幕府二代将軍。浜松生まれとしては唯一の天下人。城下東側の早馬町付近の武家屋敷で生まれたとされ、早馬町には「誕生橋」があった。浜松城内の二の丸にも「御誕生場」が設けられていた。</p>
	<p>さいごうのつぼね 西郷局 ?～1589 戦国時代</p>	<p>西郷(掛川市)出身。夫の戦死後浜松城に出仕、家康の側室となり、三男秀忠と四男忠吉を生む。浜松城下の心造寺(中央区)は、家康が秀忠の健勝を祈願して天正8年(1580)に建立し、開基を西郷局とする。法号は「心造寺殿松誉貞寿大姉」。</p>
	<p>おまんのかた 於万の方 1548～1620 戦国時代</p>	<p>池鯉鮒(現愛知県知立市)の神官の娘、長勝院。侍女として出仕し、家康の側室となって、次男の秀康を身ごもるが宇布見・中村家で出産。家康正室の築山殿との確執があったという。結城家の養子となった秀康とともに福井で暮らす。</p>

	<p>あちやのつぼね 阿茶局 1555～1637 戦国時代</p>	<p>武田家家臣・飯田直政の娘、未亡人。徳川家康に召し出されて浜松城へ出仕し、側室となった。万斛(現中央区中郡町)の鈴木権右衛門家に預けられ、家康が鈴木家に通った。鈴木家は、江戸時代に単独で浜松城主に拝謁が許された独礼庄屋のひとり。</p>
	<p>ほりおよしはる 堀尾吉晴 1543～1611 戦国時代</p>	<p>尾張出身で豊臣秀吉の家臣。徳川家康の関東移封後、秀吉の命によって家康旧領のうち浜松城主となり、天守を築くなど城と城下町を一新した。秀吉没後におこった関ヶ原合戦では家康に味方して、出雲(島根県)松江城主となる。</p>
	<p>きはらよしつぐ 木原吉次 16世紀 戦国時代</p>	<p>旧姓鈴木、木原村(現袋井市)に所領を得て改姓。徳川家康の命で、浜松城の普請奉行となる。家康とともに江戸に移り、江戸の城下町の建設をはじめ代々が大工として活躍した。一族の鈴木長次は、五社・諏訪神社の造営にも関わった。</p>
	<p>かんぜもとなお 観世元尚 ?～1577 戦国時代</p>	<p>観世流能楽師。当時戦乱の京都を避け、父とともに浜松で徳川家康の庇護を受ける。家康長男の信康元服の際には、観世流が浜松城(引間城)で能を舞い信康の能の指南となる。徳川家歴代の支援を受け、元尚の子の代で観世流は再興をはたす。</p>
	<p>すみのくさりょうい 角倉了以 1554～1614 江戸時代</p>	<p>京都の豪商。豊臣秀吉から朱印状を得て海外貿易も展開した。河川交通路の開設に力を入れ、全国の河川を掘削して航路を開いた。徳川家康から天竜川を開削する命を受けてこれを実現し、舟運による天竜川中下流域の物流を拡大した。</p>
	<p>どくたんしょうえい 独湛性瑩 1628～1706 江戸時代</p>	<p>中国の僧。江戸時代に師の隠元とともに来日し、黄檗宗を日本に広めた。遠江では旗本・近藤家の支援を得て、初山宝林寺や大雄寺など現浜松市付近に教線を展開し、他派の寺院とも交流した。黄檗宗本山・京都萬福寺の四世も務めた。</p>
	<p>すぎうらくにあきら 杉浦国頭 1678～1740 江戸時代</p>	<p>浜松城下・諏訪神社の神官、国学者で歌人。養子として諏訪神社世襲神官の杉浦家を継ぐ。江戸滞在中に国学を荷田春満に学び、その姪・真崎を妻とした。『曳駒拾遺』を著し、江戸時代中頃の浜松周辺の地誌を記す。墓地が諏訪神社故地(六本松)付近にある。</p>
	<p>わたなべもうあん 渡辺蒙庵 1687～1775 江戸時代</p>	<p>医師、儒学者。京都にて医学と儒学を学び、浜松藩主・松平資訓に仕える。職を辞してからは浜松にて塾を開き、教育と著述に専念した。賀茂真淵ら多くの門人を育てた。城下で歌会を開催している。内山真龍の妻は蒙庵の孫娘にあたる。</p>
<p>蒙庵旧居付近(伝馬町)</p>		

	<p>かものまぶち 賀茂真淵 1697～1769 江戸時代</p>	<p>いば伊場村(中央区東伊場一丁目)に生まれ、浜松宿本陣梅谷家の養子となった。荷田春満に師事して国学を志す。とりわけ万葉集を研究し、多くの弟子を育てた。江戸にて田安宗武に仕え、日本橋浜町に隠居後も国学の講義と歌会を続けた。</p>
	<p>こんどうもちゆき 近藤用随 1715～1781 江戸時代</p>	<p>旗本、気賀近藤家六代。宝永東海地震(1707)による津波で、領地である浜名湖畔の水田が被害を受け土壌に塩分が残ってしまった。そこで、蘭草の栽培を奨励して商品作物とし、領地の経営を回復した。細江神社境内にある蘭草神社に祭祀が継承されている。</p>
	<p>はかまたよしなが 袴田喜長 1716～1791 江戸時代</p>	<p>二俣村(現天竜区)の庄屋。洪水のたびに天竜川から逆流する二俣川を見かね、私財を投じて鳥羽山の開削を行い、大きく蛇行していた二俣川の流路を変更して二俣村の減災を果たした。開削水路の脇に立つ石碑の前では現在でも頌徳祭が行われている。</p>
	<p>うちやまたつ 内山真龍 1740～1821 江戸時代</p>	<p>おおや大谷村(現天竜区)の庄屋に生まれる。賀茂真淵らに師事して国学を学ぶ。遠江を幅広く取材して寛政11年(1799)、『遠江国風土記伝』を著した。江戸時代後半の遠江の地誌として貴重な史料である。写本も数多く作られている。</p>
	<p>たかばやしみちあきら 高林方朗 1769～1846 江戸時代</p>	<p>ありたま有玉下村の独礼庄屋、国学者。内山真龍、本居宣長に学ぶ。浜松藩主・水野忠邦が京都所司代に任じられた時期には、求めに応じて上京し国学を教授した。『二条日記』はその記録。師の師にあたる賀茂真淵の顕彰にもつとめた。</p>
	<p>いのうただたか 伊能忠敬 1745～1818 江戸時代</p>	<p>下総(現千葉県)出身、佐倉の伊能家を継ぎ、家督を譲って隠居してから暦学や測量を学ぶ。幕府の命を受けて日本全国の海岸線を測量し、正確な日本地図を作製した。浜松では、海岸や街道だけでなく、佐鳴湖や浜名湖の測量も手掛けた。</p>
	<p>しばこうかん 司馬江漢 1747～1818 江戸時代</p>	<p>江戸の蘭学者、また洋画を学んで西洋風の油彩画も描いた。安永7年(1788)長崎への道中で東海道の掛川宿から北上して秋葉山に参詣し、熊(現天竜区)を経由した経緯を書画とともに『江漢西遊日記』、『西遊旅譚』に著している。</p>
	<p>じっぺんしゃいっく 十返舎一九 1765～1831 江戸時代</p>	<p>駿府(静岡市)出身の戯作者。『東海道中膝栗毛』を表し、弥次・喜多という二人の旅人を通して、現市内では天竜川の渡しから浜松での宿泊、翌日の今切れの渡しまでを軽妙に描く。『膝栗毛』は『滑稽本』などの続編も出版された江戸時代のベストセラー。</p>

	<p>きよくていばきん 曲亭馬琴 1767～1848 江戸時代</p>	<p>『南総里見八犬伝』などで有名な江戸の読本作家、滝沢馬琴。山東京伝に師事した。享和2年(1802)、掛川から秋葉山に参詣したようすを『鞆旅漫録』に記した。秋葉山のことを「この社、近年もっとも繁昌なり」などと表現している。</p>
	<p>みずのただくに 水野忠邦 1794～1851 江戸時代</p>	<p>水野氏は家康の生母・於大の方を輩出した一族。肥前唐津(長崎県)から転封を希望して浜松城主となり、念願の老中を務めた。浜松藩領では新源太夫堀を開削するなど新田開発と舟運の復航をしたが、佐鳴湖畔の三ツ山開墾では風光明媚な景観を破壊して悪評。</p>
	<p>たけむらひろかげ 竹村広蔭 1793～1866 江戸時代</p>	<p>入野村庄屋・竹村家の分家。村周辺の移り変わりを記した『変化抄』を残す。近江八景(琵琶湖周辺の景観)に倣い、当時の文人とともに佐鳴八景を制定した。歌人でもあり、佐鳴湖畔で当時の識者たちと歌会を開催している。</p>
	<p>あんどうひろしげ 安藤広重 1797～1858 江戸時代</p>	<p>歌川豊広の門人、江戸の浮世絵師。多くの道中ものや名所図を出版した。なかでも東海道五十三次の連作が人気を博し、シリーズ化されている。当地では、見附地先の天竜川から舞坂付近の浜名湖まで、何種類かの風景が描かれている。</p>
	<p>おのえいざぶろう 尾上栄三郎 1829～1858 江戸時代</p>	<p>江戸の歌舞伎役者、全国各地で巡業し、歌舞伎を広めた。浦川(天竜区佐久間町)に歌舞伎を伝えたところで病没、同地に墓がある。浦川では墓地の祭祀とともに農村歌舞伎を継承している。また、鶴見町(中央区)に弟子の墓がある。</p>
	<p>もりたやひこのじょう 森田屋彦之丞 19世紀 江戸時代</p>	<p>江戸の海苔商人。浅瀬の広がる浜名湖を適地とみて、海苔職人の大森三次郎とともに江戸前の海苔養殖技術を舞坂に伝える。現在も舞坂町では「森田屋海苔祖神」として顕彰し、二人の供養塔が同地の宝珠院に並んで建立されている。</p>
	<p>いのうええんりょう 井上延陵 ?～1897 近現代</p>	<p>井上八郎、旧幕臣。明治維新後の静岡藩に赴任し、浜松勤番組頭となる。堀留運河の開設など浜松の殖産興業に尽力した。浜松が徳川家康ゆかりの地であることを重視し、引間城跡に東照宮を勧請して、家康の遺構の保存と顕彰とに努めた。</p>
	<p>こやまみい(みゑ) 小山みい(みゑ) 1821～1892 近現代</p>	<p>本郷村(現中央区都盛町)出身、織物の名手。近在の織り手を集めて組合を結成し、農村の女性を中心として、遠州織物の工業化を果たした。市内の蒲神明宮が織物の神様を祭神とする縁で、みい(本名はみゑか)の創設した永隆社が灯籠一対を寄進している。</p>

 <p>和泉屋跡</p>	<p>きまたくら 木俣くら 1844～1919 近現代</p>	<p>まんごく 万斛村(現中央区中郡町)の生まれ、木舟村(現浜名区貴布祢)の商家・和泉屋に嫁ぎ、遠州木綿の生産に「十反引き」(10反の布を続けて織る手法)を導入し、発展させたという。浜松で木綿織が発展したのは、綿花栽培とともに、藩主・井上家の奨励が大きかった。</p>
 <p>現在の JR 浜松工場</p>	<p>つみしんぺい 鶴見信平 1848～1914 近現代</p>	<p>半田村(中央区半田町)の出身、鶴見家の養子となる。実業家として活躍し、浜松商工会議所の初代会頭、浜松町長また市制施行時の浜松市長代理をつとめた。鉄道院浜松工場(現JR東海浜松工場)の誘致、浜名湖畔の養魚場建設などに尽力した。</p>
 <p>源長院句碑</p>	<p>まつしまじっこ 松島十湖 1849～1926 近現代</p>	<p>吉平。中善地村(中央区豊西町)出身の実業家、俳人。大瀬村(とちぎ いはく)の榎木夷白らに学ぶ。引佐(いな さ あらたま) 佐藤玉郡長などを歴任した。「浜松は出世城なり初鯉」の句を詠む。地元の源長院など各地に句碑が残る。また、洪水により生じた十湖池がビオトープとして今も維持されている。</p>
 <p>オルガン坂(普大寺跡)</p>	<p>やまはとらくす 山葉寅楠 1851～1915 近現代</p>	<p>紀州徳川藩士の次男。浜松医学校の福島豊策の招きで、医療器具の技術者として浜松に職を得た。福島で紹介で元城小学校のオルガンを修理したことをきっかけに、浜松にて楽器製造会社を設立した。最初の工場は普大寺跡にあった。</p>
 <p>浜名湖畔の養鰻場</p>	<p>はっとりくらじろう 服部倉治郎 1853～1920 近現代</p>	<p>東京深川の出身。養魚事業拡大にあたり、浜名湖に注目し、愛知県立水産試験場に勤めていた中村正輔(宇布見中村家の後裔)の助言と協力を得て、浜名湖畔にてうなぎとすっぽんの養殖をはじめ、名産品として発展していった。</p>
 <p>同心遠慮講の碑(貴布祢)</p>	<p>ひらのまたじゅうろう 平野又十郎 1852～1928 近現代</p>	<p>かけつか 掛塚村(現磐田市)出身、実業家。貴布祢村(現浜名区)の平野家の養子となり、五代目又十郎を継ぐ。「同心遠慮講」という貯蓄組合を組織し、後に遠州銀行(静岡銀行の前身)を創設する。浜松裁縫女学校(現学芸高校)を創始している。</p>
 <p>百里園銅版画(部分)</p>	<p>きがりん 気賀林 1810～1883 近現代</p>	<p>林右衛門。き賀の生まれ。江戸時代までは不毛の原野だった三方原台地を開拓して茶園を造成し、製茶工場を操業して「百里園」と名付けた。浜松城下と浜名湖を結ぶ堀留運河を開削するなど殖産興業に尽力した。「三富翁」の碑がある。</p>
 <p>金原明善生家</p>	<p>きんばらめいぜん 金原明善 1832～1923 近現代</p>	<p>あんま 安間村(中央区)の名主。旗本松平氏の代官として江戸に学んだ。のち和田村村長、静岡県議を歴任。洪水被害を繰り返す天竜川下流の治水工事、また中流域の植林などの事業をすすめた。さらに三方原開墾などの事業にも着手した。</p>

 <p>旧浜松中学校(浜松北高)</p>	<p>すずきかくま 鈴木覚馬 1861～1937 近現代</p>	<p>草崎(磐田市)出身の郷土史家、福田小学校校長。のちに、浜松中学校(現浜松北高等学校)教諭として浜松高町に在住した。県内の諸文献や伝承を精査し、約20年の年月をかけて『嶽南史』を出版した。※この場合の嶽南は静岡県を指す。</p>
 <p>旧浜松市歌</p>	<p>もりおうがい 森鷗外 1862～1922 近現代</p>	<p>林太郎。作家、軍医。大正元年(1912)、乃木希典の殉死を契機に歴史小説に転じ、『渋江抽斎』を描く。浜松在城期の徳川家康と家臣団も題材として取材している。旧浜松市歌の作詞も手掛けた。なお同歌の作曲者は、本居宣長の後裔で作曲家の本居長世。</p>
 <p>奥山線跡亀山トンネル</p>	<p>いとうようぞう 伊東要蔵 1864～1934 近現代</p>	<p>近代の実業家、政治家。慶応義塾大学において福沢諭吉らに師事。慶応義塾の教員などを経て、中川村(浜名区細江町)の伊東家の養子となる。浜松から三方原、金指を経由して奥山へ向かう軽便鉄道・奥山線の開設などに尽力した。</p>
 <p>昭和初期の浜松駅前</p>	<p>なつめそうせき 夏目漱石 1967～1916 近現代</p>	<p>英文学者・小説家。明治41年(1908)の新聞連載小説『三四郎』で、冒頭、主人公が熊本から列車で上京する道中、浜松駅では長時間停車した情景を描く。列車では後に深く関わる人物と同席し、駅弁を食べている。浜松駅のホームを歩く西洋人を描写している。</p>
 <p>熊の旧街道</p>	<p>やなぎたくにお 柳田國男 1875～1962 近現代</p>	<p>兵庫県出身。柳田家に養子。画家の松岡映丘は実弟。『遠野物語』などの著作がある日本民俗学の祖。著書のうち『秋風帖』で浜松から二俣、熊を経由した紀行文を掲載する。浜松での講演をきっかけに、飯尾哲爾ら地元研究者による『土のいろ』の刊行につながる。</p>
 <p>京丸の釋迢空歌碑</p>	<p>おりくちしのぶ 折口信夫 1887～1953 近現代</p>	<p>民俗学者、歌人。釋迢空と号す。新野(長野県)から水窪(天竜区)へ足を踏み入れ、山住や京丸にも滞在した。市内各地に歌碑が残る。昭和5年(1930)には、西浦田楽を訪ね、その年のうちには東京公演(御開帳)を実現した。</p>
 <p>静岡銀行(旧遠州銀行)</p>	<p>なかむらよしへい 中村與資平 1880～1963 近現代</p>	<p>天王新田村(中央区)出身の建築家。東京帝国大学建築学科卒業後に、辰野金吾らの事務所を経て独立。手がけた建物のうち、浜松銀行協会、遠州銀行本店(現静岡銀行)のほか、静岡市庁舎、静岡県庁本館、豊橋市公会堂などが現存する。</p>
 <p>鈴木式織機発祥の地</p>	<p>すずきみちお 鈴木道雄 1887～1982 近現代</p>	<p>ほうがわ ねずみの 芳川村 鼠野(中央区)出身。技術者、実業家。近代の遠州織物の興隆をみて大工職から織機製作に転じ、鈴木式織機製作所を設立した。戦後はさらにオートバイ、軽自動車の生産に乗り出し、鈴木自動車工業の社長となった。</p>

	<p>たかのつき 鷹野つき</p> <p>1890～1943 近現代</p>	<p>浜松町下垂(現中央区尾張町)出身の女流小説家、島崎藤村の「処女地」同人。東京在住の晩年の著作のうちに、幼少期の浜松での思い出を回想した『四季と子供』がある。つぎの祖母は、浜松城において城主の姫に出仕していたという。</p>
	<p>かわむらかねと 川村カ子ト</p> <p>1893～1977 近現代</p>	<p>北海道出身のアイス、測量技師。三信鉄道(現JR飯田線)の建設工事で中央構造線沿いの山峡の難所を担当、全線開通にこぎつける。カ子トの功績を紹介するための演劇が創作されている。飯田線は、佐久間ダム建設で一部路線が水窪経由に迂回した。</p>
	<p>しらいつぞう 白井鐵造</p> <p>1900～1983 近現代</p>	<p>犬居村(天竜区春野町)出身、宝塚歌劇の演出家、「すみれの花」で始まるテーマ曲の作詩者。宝塚歌劇にレビューを取り入れた「パリゼット」ほかを演出した。出身地という縁で、春野町は宝塚歌劇団との交流と、スマイルの栽培をつづけている。</p>
	<p>ほんだそういちろう 本田宗一郎</p> <p>1906～1991 近現代</p>	<p>光明村(天竜区)出身。アート商会から自動車整備工として独立、終戦直後からオートバイを独学で開発し、本田技研工業を一代で築いた。同氏を記念するものづくり伝承館は、国の登録有形文化財・旧二俣町役場をリノベーションした施設。</p>
	<p>あきのふく 秋野不矩</p> <p>1908～2001 近現代</p>	<p>二俣村(天竜区)出身の日本画家。石井林響に師事した。上村松篁らと創造美術(現創画会)を結成した。市内の風景や民俗芸能なども画題としている。生前、生家に近い丘の上に開館した秋野不矩美術館は、建築家・藤森照信の設計。</p>
	<p>のじませいじ 野島青茲</p> <p>1915～1972 近現代</p>	<p>気賀(浜名区細江町)出身の日本画家。松岡映丘に師事した。蘭草栽培のようすなど郷土の題材も描く。奈良・法隆寺金堂壁画の模写、さらに再現事業にも参加している。実家は、複数の建物が国の登録有形文化財となっている吉野屋。</p>
	<p>きのしたけいすけ 木下恵介</p> <p>1912～1998 近現代</p>	<p>浜松町(中央区伝馬町)にあった尾張屋出身の映画監督。代表作のうちに、『涙』など昭和期の浜松の風景を撮影したものがある。戦時中は春野町に疎開していた。中村與資平の設計による旧浜松銀行協会(市指定有形文化財)は、現在木下恵介記念館として公開中。</p>
	<p>あらいつねやす 新井恒易</p> <p>1912～1999 近現代</p>	<p>埼玉県出身の民俗学研究者、教育評論家。とくに東海地域の田遊びに注目した。『中世芸能の研究』では、三河各地とともに、西浦・神沢・懐山(以上天竜区)・寺野・川名(浜名区)など、遠江の田楽やひよんどりとおくないを取材し、祭りで唱えられる詞章を含めて紹介した。</p>

表1-5-2 浜松市内の主な国衆、戦国大名

名 前	解 説
いまがわ 今川	足利氏の一族で、三河今川を発祥とする。駿河を本拠とした守護・戦国大名。遠江の覇権を斯波氏らと争った。最盛期には三河までも領国とするが、義元が織田信長に敗死してから衰退する。
しば 斯波	尾張を本拠とした守護・戦国大名。越前・遠江の守護も兼ね、三河・遠江で、今川氏とたびたび抗争していた。引間は斯波方、今川方双方の争奪の場となり、斯波氏の敗退で決着する。
いのお 飯尾	室町幕府の奉行衆、三善一族という。駿河の今川氏に招かれて被官。三代にわたり引間城主を務めたが家康の遠江侵攻による動揺の中で今川氏真に殺害された。東漸寺に供養塔が残る。
えま 江間(馬)	今川家臣で引間城の飯尾氏に従う。飯尾氏滅亡後には今川氏と徳川氏をめぐって一族が分裂した。城下町に「江間殿小路」、白華寺(上島七丁目)に「江間殿松」などの旧跡が伝えられている。
ほりえ 堀江	越前国坂井郡の出自という。村櫛荘の佐田城にはいり現地荘官を務めた。斯波氏について今川方と対峙したが、伊勢新九郎に攻め落とされた。子孫は大澤家に仕えたという。
おおさわ 大澤	丹波国大沢から遠江に下向、今川家に仕え堀江氏滅亡後に堀江城主。家康の遠江侵攻に抵抗したが後に臣従した。江戸時代には高家として存続。廃藩置県では一時「堀江県」を成立させた。
きら 吉良	三河の有力武将。斯波氏のもとで遠江に進出し、浜松荘を支配した。東海道沿いの引間とともに河口の白羽湊を掌握していた。法蔵寺(中央区白羽町)を開基し、供養塔が残る。
おおこうち 大河内	今川氏に対峙した吉良氏について引間城主を任されたが、今川方に攻められて最終的には開城した。一族のうちで後に家康についた家系が、大河内松平を名乗る。
はまな 浜名	浜名湖北岸の領主。南北朝期には北朝方に加担し一時遠江を離脱、千頭峯城ほか南朝の拠点陥落で再度勢力を拡大した。将軍家、ついで今川氏に属したが、家康侵攻後衰退した。
つづき 都築	今川家臣、家康の遠江侵攻で本領を安堵される。三方ヶ原の戦いで敗走する家康の近くに従って帰城、都築氏の妻が家臣らに粥を提供し、家康が感心したという逸話が残る。
ふたまた 二俣	それぞれ遠江に拠点を置いた国衆。今川家臣となり二俣城主として名前が見える。二俣氏のころの城は「古城」と呼ばれる笹岡城跡と推定される。松井氏のころから、現二俣城跡が拠点となったと思われる。戦国大名今川家の瓦解により衰退した。
まつい 松井	
い 井伊	都田川流域他を本拠とした国衆。南北朝期から活躍し、のち今川家に従属と離反を繰り返した。直政が家康に仕えて徳川四天王の一人に認められ、宗家は彦根藩主として幕府重職を務めた。
まつした 松下	今川家について頭陀寺に居館をおいた。家康の遠江侵攻前後から徳川につく。秀吉に召し出されて久野城主。後、徳川家に仕える。一族から密偵を輩出し、また柳生家との血縁関係がある。
こんどう 近藤	三河国宇利(新城市)から家康の遠江侵攻にしたがって進出。井伊家旧領の都田川流域と内野周辺を拝領し、江戸時代には分家してそれぞれ旗本となる。黄檗宗の遠江布教をささえた。
おくやま 奥山	南北朝期から名前が見える。山香荘奥領家ほか北遠の国境近くを領有。高根城他に一族が拠点を置いた。武田氏、今川氏また徳川氏の侵攻によって一族が分裂して衰退。
あまの 天野	伊豆国天野に本拠を置き、鎌倉幕府に仕えた。山香荘の地頭となり、気多川流域をはじめ山香荘広域を支配し、荘園領主(領家)と対立した。犬居城主。三河など各地に居住した同族がいる。
いちの 市野	近江出身と伝える、永禄 11 年(1568)から家康に仕え市野(中央区市野町)周辺に土着した。江戸時代には四代にわたって代官をつとめた。四代の墓所は宗安寺にある。
はっとり 服部	大久保付近に土着、江戸時代に代官をつとめ山崎・古人見・志都呂・神ヶ谷などもとの浜松荘西部を領地とした。今切関所番となると、志都呂に陣屋を置いた。

表1-5-3 浜松城 歴代城主

西暦	城主	在城期間 自 至	年限	地域(国)の 支配者	石高	前封地	後封地	在城中の役職等、備考
1565	引間城主として名前が見える武将 永正年間、久野越中守屋敷を三善為連が城とする。『浜松御在城記』 大河内備中守貞綱(別説)『曳馬拾遺』 飯尾善四郎堅連 豊前守乗連 豊前守連龍 (江間安芸守泰顕・加賀守時成)	天文? ~ ~ 永禄3 永禄3 ~ 永禄8		斯波氏・吉良氏 今川氏				(誅殺) 飯尾連龍、今川氏真に殺害される。 安芸守と加賀守が内紛、永禄11(1568)家康が引間城を占拠。
1570	徳川三河守家康	元亀1 ~ 天正14	17年	徳川氏 武田氏	初52万石 後152万石	三河岡崎	駿河府中	元亀3(1572)三方ヶ原にて武田信玄に敗北。 天正7年(1579)信康自刃、築山御前殺害。 後江戸252万石、開幕400万石。 普沼定政預城。後土岐に復姓、下総相馬。
1586	(城代)	天正14 ~ 天正18	(4年)					
1590	堀尾帯刀吉晴	天正18 ~ 慶長4	2代 11年	豊臣氏	初12万石 後17万石	近江佐和山	(讓)	豊臣系大名、中老。
1599	信濃守忠氏	慶長4 ~ 慶長5					出雲松江	出雲・隠岐24万石、国宝・松江城を建設。
1601	松平左馬亮忠頼	慶長6 ~ 慶長14	9年		5万石	美濃金山	(横死)	子忠重は上総佐貫で大名に復帰。後掛川城主。
1609	水野対馬守重仲	慶長14 ~ 元和5	11年		初2.5万石 後3.5万石	常陸	紀伊新宮	駿遠国主・徳川頼宣の付家老。 元和2(1616)家康、駿河で没する。 徳川頼宣が紀伊・和歌山に移封。家老として新宮を拝領。
1619	高力摂津守忠房	元和5 ~ 寛永15	20年		初3.1万石 後3.0万石	武蔵岩槻	肥前島原	寛永1~9(1623~1632)駿遠国主に徳川忠長
1638	松平和泉守乗寿	寛永15 ~ 正保1	7年		3.5万石	美濃岩村	上野館林	老中・侍従
1644	太田備中守資宗	正保1 ~ 寛文11	2代 35年		3.5万石	三河西尾		
1671	摂津守資次	寛文11 ~ 延宝6			3.2万石		(致仕) 大坂城代	奏者番・寺社奉行 老中
1678	青山因幡守宗俊	延宝6 ~ 延宝7	3代 25年		5万石	大坂城代		このころ、浜松の領分絵図を製作する。
1679	和泉守忠雄	延宝7 ~ 貞享2					丹波亀山	
1685	下野守忠重	貞享2 ~ 元禄15						
1702	松平伯耆守資俊	元禄15 ~ 享保8	2代 28年	徳川氏 (将軍家)	7万石	常陸笠間		本庄姓。松平姓を拝領。侍従
1723	豊後守資訓	享保8 ~ 享保14					三河吉田	侍従
1729	松平伊豆守信祝	享保14 ~ 延享1	2代 21年		7万石	三河吉田		大坂城代・侍従・老中
1744	伊豆守信復	延享1 ~ 寛延2					三河吉田	
1749	松平豊後守資訓	寛延2 ~ 宝暦2	2代 11年		7万石	三河吉田		浜松城再任。本庄姓。京都所司代・侍従
1752	富之助資昌	宝暦2 ~ 宝暦8					丹後宮津	
1758	井上河内守正経	宝暦8 ~ 明和3	3代 60年		6万石	京都所司代		京都所司代・侍従・老中 奏者番・寺社奉行
1766	河内守正定	明和3 ~ 天明6					陸奥棚倉	
1786	河内守正甫	天明6 ~ 文化14						
1817	水野越前守忠邦	文化14 ~ 弘化2	2代 29年		初6万石 後7万石	肥前唐津		寺社奉行・大坂城代・老中・侍従
1845	金五郎忠精	弘化2 ~ 弘化2					出羽山形	
1845	井上河内守正春	弘化2 ~ 弘化4	2代 24年		6万石	上野館林		浜松城再任。弘化3年 城下で一揆。 寺社奉行・老中・侍従
1847	河内守正直	弘化4 ~ 明治1						
1868							上総鶴舞	

1-6.文化財

(1)文化財の指定などの状況（令和5年(2023)2月現在）

本市では、集落の起こりから発展に至る縄文、弥生、古墳時代を通じて形作られた特徴的な遺跡が多数残り、当時の生活の様子をうかがい知ることができる。市では、そうした貴重な遺跡や出土品をはじめ、建造物、民俗文化財などを数多く指定している。

浜松市内に所在する、国の指定文化財は、重要文化財 20 件、無形民俗文化財 2 件、史跡 4 件、名勝 1 件、天然記念物 2 件の計 29 件である。

静岡県内の指定文化財は、有形文化財 44 件、有形民俗文化財 5 件、無形民俗文化財 5 件、史跡 9 件、名勝 5 件、天然記念物 15 件の計 83 件所在している。

浜松市の指定文化財は、有形文化財 197 件、有形民俗文化財 10 件、無形民俗文化財 4 件、史跡 67 件、名勝 4 件、天然記念物 44 件の計 326 件所在している。

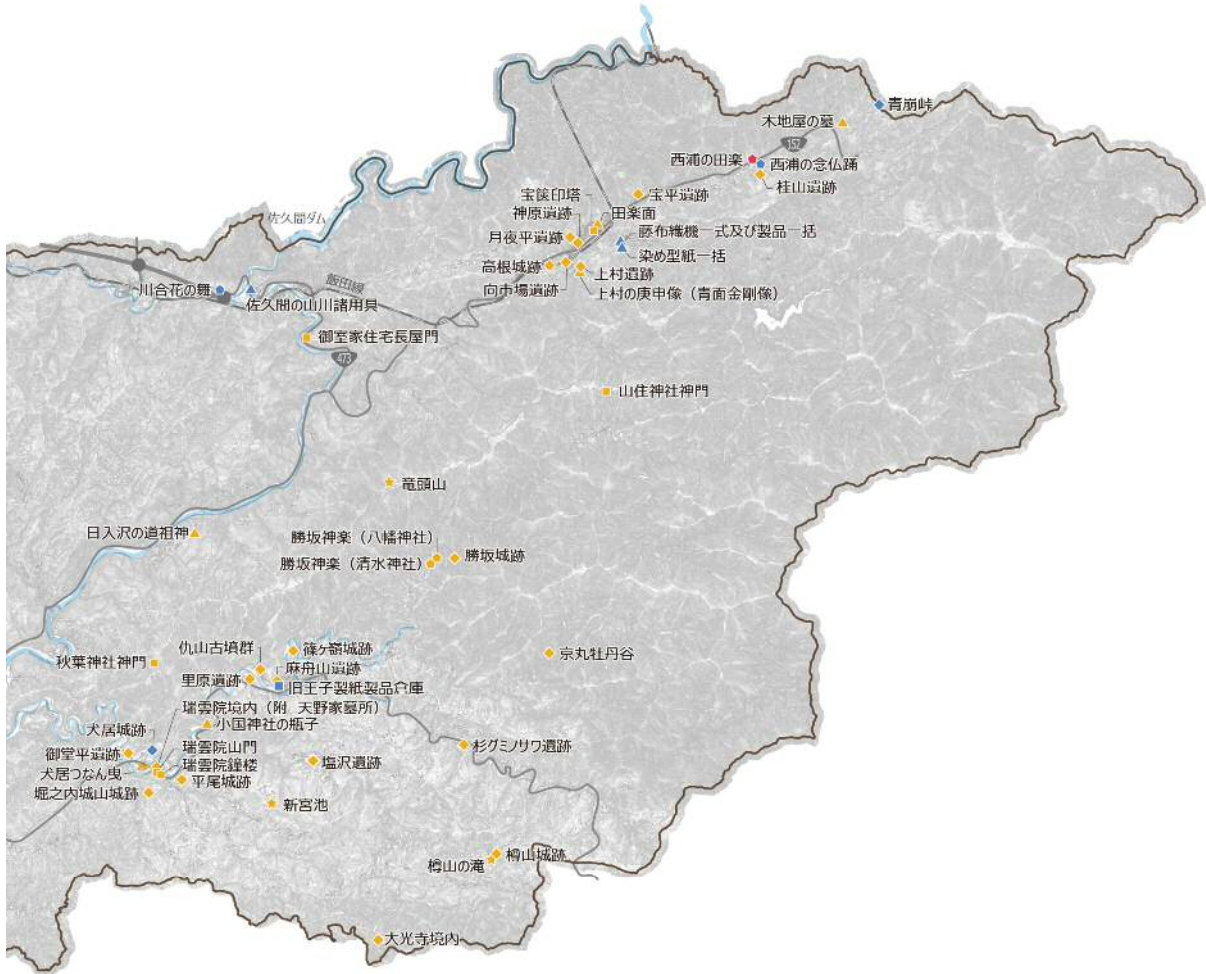
その他、国の登録有形文化財(建造物)が 88 件所在している。

表1-6-1 浜松市における指定文化財などの件数（R5.2.1 現在） (件)

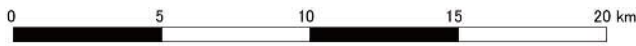
種類	国		県	市	
	指定	登録	指定	指定	
有形文化財	建造物	5	88	4	21
	絵画	1	0	6	23
	彫刻	4	0	12	54
	工芸品	8	0	12	32
	書跡・典籍	1	0	2	32
	古文書	1	0	1	19
	考古資料	0	0	7	9
	歴史資料	0	0	0	7
民俗文化財	有形の民俗文化財	0	0	5	10
	無形の民俗文化財	2	0	5	4
記念物	遺跡	4	0	9	67
	名勝地	1	0	5	4
	動物・植物・地質鉱物	2	0	15	44
合計		29	88	83	326



図1-6-1 指定文化財の分布(国、静岡県、浜松市が指定する建造物、有形民俗文化財、無形民俗文化財、史跡、名勝を掲載)



国指定文化財	県指定文化財	市指定文化財
■ (国) 建造物	■ (県) 建造物	■ (市) 建造物
◆ (国) 史跡	◆ (県) 史跡	◆ (市) 史跡
▲ (国) 無形民俗文化財	▲ (県) 無形民俗文化財	▲ (市) 無形民俗文化財
★ (国) 名勝	★ (県) 名勝	★ (市) 名勝



(2)国の指定等文化財

国の指定等文化財は、重要文化財 20 件(うち建造物 5 件、絵画 1 件、彫刻 4 件、工芸品 8 件、書跡・典籍 1 件、古文書 1 件)、重要無形民俗文化財 2 件、史跡 4 件、名勝 1 件、天然記念物 2 件の合計 29 件が所在するほか、登録有形文化財 88 件が所在する。これらのうち、主な文化財を以下に示す。

①重要文化財

ア.方広寺七尊菩薩堂 (建築年代:応永 8 年(1401))

方広寺七尊菩薩堂は、一間社流造柿葺の建物である。方広寺は臨済宗の本山の一つとして大伽藍を誇ったが、明治 14 年(1881)の火災でほとんどが焼失し、この堂だけが被災を免れた。覆屋の中にある間口 90 センチメートルの建物が静岡県下最古の木造建築物である。創建年(弘和 4 年(1384))に近く、鎌倉末期の建築様式を今に伝える。

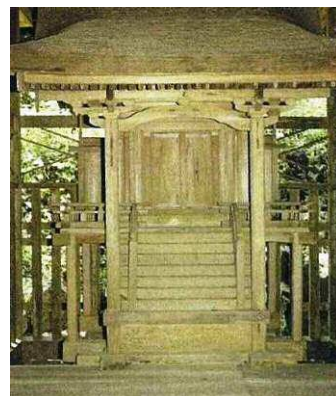


図1-6-2 方広寺七尊菩薩堂

イ.中村家住宅 (建築年代:貞享5年(1688))

中村家は戦国時代に、今川氏、徳川氏に仕え、浜名湖の舟運(兵糧運搬)をまかされた。桁行21.3 メートル、梁間11.2 メートル、面積 238.7 平方メートル、寄棟造茅葺の建物である。棟通りと梁間方向中央の柱通りを揃え、これを境として、桁行方向に部屋が食い違いの配置になっているのが特徴である。また、内部の板戸など古い建具も残されている。庭内に家康の次男・結城秀康が誕生した際の胞衣塚が設けられている。



図1-6-3 中村家住宅

ウ.寶林寺仏殿・方丈¹ (建築年代:寶林寺仏殿は寛文7年(1667)、寶林寺方丈は正徳6年(1716))

寛文 4 年(1664)、明国の僧独湛によって開かれた黄檗宗の寺院で、金指、気賀両近藤家の菩提寺として栄えた。開祖を隠元とする。

仏殿は、桁行 9.1 メートル、梁間 10.9 メートル、一重入母屋造柿葺の建物である。昭和 60 年(1985)から 6 年かけて解体修理を行い、創建当初の姿に復元した。

方丈は、桁行 19.2 メートル、梁間 12.3 メートル、一重寄棟造茅葺の建物である。黄檗宗の伝来初期の建築であり、同宗特有の様式を持つものである。



図1-6-4 寶林寺仏殿

¹ 一般の寺院名称として表記する場合は宝林寺と記載しているが、重要文化財の指定名称を表記する場合は寶林寺と記載する。

はまな そうしやしんめいぐうほんでん 工. 浜名惣社神明宮本殿 (建築年代: 江戸後期)

浜名惣社神明宮は、古くより伊勢神宮の浜名神戸があった浜名湖(猪鼻湖)の北辺にある。本殿は、桁行3.1メートル、梁間2.3メートル、一重、板倉、棟持柱付、切妻造、茅葺の建物である。文政7年(1824)に修理した棟札がある。高床とせず礎石上に土台を置き、板材を井桁状に積み重ねて四面の壁とした井籠造と呼ばれるもので、他に類例のない古い時代の神社建築を遺すものとして貴重である。



図1-6-5 浜名惣社神明宮本殿

すずき けいじゅうたくしゅおく かまや オ. 鈴木家住宅主屋・釜屋 (建築年代: 釜屋は文政4年(1821)、主屋は釜屋と同じころ)

鈴木家住宅は、主屋の隣に釜屋を隣接して建てて内部を一体的空間とする、釜屋造りと呼ばれる形式の民家である。主屋は桁行8.2メートル、梁間7.4メートル、寄棟造茅葺の建物で、棟方向の違う釜屋を連結して内部を一体とする。静岡県西部から愛知県東部にかけて分布していた釜屋造り形式の数少ない遺構であり、わが国における分棟型民家の展開を示す民家の一つとして重要な建物である。



図1-6-6 鈴木家住宅主屋・釜屋

②重要無形民俗文化財

にしうれ でんがく ア. 西浦の田楽

西浦の小字所能にある観音堂境内にて、旧暦1月18日の月の出から翌日の日の出まで、夜を徹して行われる田楽。養老3年(719)に行基が、この地に来て、正観世音の仏像と数個の仮面をつくり、その年の7月10日より田楽がはじまり今日に及んだものであると伝えている。五穀豊穡、無病息災などを祈願する神事である。



図1-6-7 西浦の田楽

とおとうみ イ. 遠江のひよんどりとおくない

正月初め市内3か所(浜名区引佐町渋川寺野、同町川名、天竜区懐山)の寺堂で、五穀豊穡、養蚕の増産などの予祝行事を中心とする中世起源の芸能が行われる。寺野及び川名では、松明を用いる所作が入っているところから「ひよんどり(=火踊り)」と呼称され、懐山では「おくない(=おこない: 社寺で行う行事の意味)」という、寺院で行われてきた修正会の修法を呼称に用いている。寺野と懐山は1月3日、川名は1月4日に行っている。



図1-6-8 寺野のひよんどり

③史跡

ア.三岳城跡 (築城年代:南北朝時代～戦国時代)

南北朝時代に南朝方についた井伊氏が拠点とした山城。南腹に現存する三岳神社を含め、山中に展開していた社寺を拠点としたものと思われる。

戦国時代に武田氏によって改修された遺構が見られる。

イ.蜷塚遺跡

縄文時代後・晩期(約 4000～3000 年前)の貝塚及び集落遺跡。遺跡の規模は約 100 メートル四方。当時は浜名湖とともに、海に続く入江だった佐鳴湖東岸の丘陵上にある。

4ヶ所の貝塚が環状に広場を囲み、住居跡や墓地が発掘されている。復元家屋や貝層保存施設がある。

ウ.二俣城跡及び鳥羽山城跡

二俣城は戦国時代に築城され、武田信玄と徳川家康が争奪するところとなった。鳥羽山城は、二俣城の南に広がる独立丘陵上に立地し、二俣城をめぐる戦の際に、徳川方の本陣が築かれた。両城とも、天正 18 年(1590)から慶長 5 年(1600)にかけて、二俣の地を領有した豊臣秀吉公配下の堀尾氏によって石垣を備えた城郭に改修された。

エ.光明山古墳

5 世紀中頃から後半にかけて築造された浜松市内最大の前方後円墳、全長 83 メートル。葺石と埴輪が見られる。二俣城・鳥羽山城と同様に、天竜川下流平野と中流の山間地の接点となる要衝にあって、陸上交通網を掌握した有力者が葬られていると推定される。

④名勝

ア.龍潭寺庭園 (作庭年代:江戸時代初期)

龍潭寺本堂北庭として築かれた池泉庭園。

中央に守護石、左右に仁王石、正面に礼拝石(坐禅石)が配され、心字池と石組が溪谷を表現している。

本堂北面からの鑑賞のほか、東側客間からの眺めも意識され、この場合は庭の最奥に井伊家歴代の位牌を納めた御霊屋が見え、そこに視点が集約するように設計されている。



図1-6-9 三岳城跡



図1-6-10 蜷塚遺跡



図1-6-11 二俣城跡



図1-6-12 光明山古墳



図1-6-13 龍潭寺庭園

⑤登録有形文化財

ア.旧田代家住宅主屋(建造物) (建築年代:安政6年(1859))

江戸時代を通じて天竜川の渡船場や筏の受け継ぎ問屋を経営していた旧家の主屋。鳥羽山城跡が所在する丘陵から天竜川へ向かう河岸段丘に南面して建つ。木造2階建、切妻造の3面に下屋を巡らせ、軒は上下階とも出桁造とする。右土間形式で、六間取の中央列前面に式台を構える。2階は八畳主体の座敷に床などを備え、南面に開放的な縁を通す。舟運による繁栄を伝える大型の民家建築。



図1-6-14 旧田代家住宅主屋

イ.凱旋記念門(建造物) (建築年代:明治39年(1906))

日露戦争に当時の鎮玉村(中央区引佐町の北部)から従軍した人たちの無事な帰還を記念し、明治39年(1906)3月に建てられた。建設に関わる設計者・施工者・工事日程など具体的な事柄は不明であるが、柱脚銘文に「明治39年3月建立」とある。

構造は、一間門、煉瓦造、幅3.2メートル、高さ3.6メートル、六所神社参道の途中に築かれている。石造柱脚の上に柱が立ち上がり、上部は欠円アーチを形成する。石製脚柱の四面には、出征従軍者氏名及び建設に際して寄附金を寄せた人々の名前や金額を各面一杯に刻んでいる。煉瓦はフランス積み、柱頭を鋸歯飾、上部中央に「凱旋記念門」と刻まれた石版を嵌め込み、最上部に重厚な笠石を載せる。



図1-6-15 凱旋記念門

ウ.天竜浜名湖鉄道機関車転車台・同機関車扇形車庫(建造物) (建築年代:昭和15年(1940))

転車台・扇形車庫とも旧国鉄二俣線が全線開通した昭和15年(1940)に建てられた。

転車台は扇形車庫の手前に位置する。全体の直径は約18.4メートル、建設当時は標準的な下路式の転車台で、中央に門型の鉄柱を建て、運転室とともに360度回転する。天竜二俣駅の核となる施設で、扇形車庫とともに天竜浜名湖鉄道のシンボルとなっている。



図1-6-16 天竜浜名湖鉄道機関車転車台・機関車扇形車庫

扇形車庫は、当初は6線分であったが、転車台から見て右側の2線分が切り縮められている。4線分は主として車両の留置に用いられている。総木造で、庫内に下る柱を少なくするために力強い架構をもつ。全国でも数少ない現役扇形庫。

(3)静岡県の指定文化財

静岡県の指定文化財は、有形文化財 44 件(建造物 4 件、絵画 6 件、彫刻 12 件、工芸品 12 件、書跡・典籍 2 件、古文書 1 件、考古資料 7 件)、有形民俗文化財 5 件、無形民俗文化財 5 件、史跡 9 件、名勝 5 件、天然記念物 15 件の合計 83 件が所在する。これらのうち、主な文化財を以下に示す。

①有形文化財

ア.旧王子製紙製品倉庫(建造物) (建築年代:明治 22 年(1889))

日本で最初の木材パルプ工場として春野町気田に完成した建物の一つである。大正 12 年(1923)に工場閉鎖のやむなきに至った。幅 18 メートル、奥行 9 メートル、煉瓦づくりで屋根は日本瓦という折衷様式である。春野中学校敷地内に「木材パルプ発祥の地」という記念碑がある。



図1-6-17 旧王子製紙製品倉庫

イ.摂社天羽槌雄神社(建造物) (建築年代:江戸中期)

浜名惣社神明宮敷地内に設けられている。天羽槌雄神社は、養蚕や機織りの神である天羽槌雄命を祀る神社である。社殿は、井籠造の流れ板葺屋根で、古代建築技法を現代に伝える貴重な建造物である。



図1-6-18 摂社天羽槌雄神社

ウ.龍潭寺伽藍(本堂、庫裡、山門、開山堂、井伊家霊屋、稲荷堂)(建造物) (建築年代:延宝4年(1676)ほか)

井伊谷西端の丘陵にあり、かつては北に隣接する井伊谷宮境内も寺域とした。臨済宗妙心寺派。永禄 3 年(1560)、桶狭間の戦いで戦死した井伊直盛の戒名をとり、「龍潭寺」と寺号が改められた。国指定の名勝庭園をはじめ、赤地に「井」の記号が描かれた籠など、井伊氏拝領の品々も収める。現在の伽藍 6 棟(本堂、庫裡、山門、開山堂、井伊家霊屋、稲荷堂)は、江戸時代に完成しており、江戸時代の禅宗寺院の形態を伝える。平成 20 年(2008)からの修理で屋根を創建当時の柿葺きに近い金属板葺きに改めた。



図1-6-19 龍潭寺本堂

工. 宝林寺山門(建造物) (建築年代:17世紀後半頃)

宝林寺は、寛文4年(1664)、明国の僧・独湛によって開かれた黄檗宗の寺院である。

山門は、正面に掲げられた山号「初山」の扁額は、黄檗宗の開祖・隠元が揮毫した。「初山」とはこの地における黄檗宗最初の寺院であることを示している。扁額には元禄6年(1693)の銘がある。



図1-6-20 宝林寺山門

②有形民俗文化財

ア. 舞阪の海苔生産用具

舞阪の海苔養殖は、舞阪の浜で海苔が採れることを知った信州諏訪出身の海苔商人・森田屋彦之丞が養殖の実験をした文政3(1820)年に始まる。

養殖方法は、江戸大森の海苔職人・三次郎が伝えたものとされる。ユリボウ(揺棒)は、海苔を育てるソダ(椎や樫の木)の枝を使う)を立てる穴を湖底にあける道具である。



図1-6-21 舞阪の海苔生産用具

③無形民俗文化財

ア. 横尾歌舞伎

起源は定かではないが、もともとは横尾地区の八柱神社や、白岩地区の六所神社の祭礼に奉納芸能として行われていたとされ、文献によると200年前には常設の舞台が設けられていたと伝わる。

役者や黒子、演奏に始まり小道具などに至るまで、すべて地域の人びとが役割を担い継承されている。



図1-6-22 横尾歌舞伎

イ. 西浦の念仏踊

水窪町西浦で、8月の盆時期、慰霊のために踊られる踊りを念仏踊と称している。精霊供養・無縁仏供養・祖霊供養などの要素が複合的に重なった念仏供養を行っている。8月8日に永泉寺で施餓鬼念仏、14日に迎え盆、16日に送り盆で組ごとに和讃・大念仏・念仏踊を行う。その後、河原などで新盆灯籠に火を付け燃やし、霊を送る。



図1-6-23 西浦の念仏踊

④天然記念物

ア.ホウジ峠の中央構造線

中央構造線は、西南日本を外帯と内帯に二分する日本最大の断層で総延長 800 キロメートルに及ぶ。

ホウジ峠はその中央構造線の擾乱帯¹上にあるとともに、水窪と佐久間を結ぶ県道の分水嶺^{みさくぼ さくま}にあって、水窪側(北)と佐久間側(南)とも直線につづく断層の谷を眺望できる。



図1-6-24 ホウジ峠の中央構造線

(4)浜松市の指定文化財

市指定文化財は、有形文化財 197 件(建造物 21 件、絵画 23 件、彫刻 54 件、工芸品 32 件、書跡・典籍 32 件、古文書 19 件、考古資料 9 件、歴史資料 7 件)、有形民俗文化財 10 件、無形民俗文化財 4 件、史跡 67 件、名勝 4 件、天然記念物 44 件の合計 326 件が所在する。これらのうち、主な文化財を以下に示す。

①有形文化財

ア.内山家住宅長屋門(建造物) (建築年代:享保 10 年(1725)以前)

遠江国豊田郡大谷村(現天竜区大谷)の名主でもあり、国学者でもあった内山真龍^{おおや}の生家にある長屋門。正確な建築時期は判らないが、「享保 10 年 7 月吉日」の祈禱札が残されている。

棧瓦葺の屋根に腰板と漆喰塗の壁の長屋門は間口が 10 メートルあり、自然石の基壇上に建てられている。



図1-6-25 内山家住宅長屋門

イ.中村家住宅長屋門(建造物) (建築年代:安永4年(1775))

文明 13 年(1481)に、中村家 14 代正實が今川氏に招かれ、遠江国磐田郡大橋郷に領地を賜り、文明 15 年(1483)に宇布見^{うぶみ}に約 3,000 平方メートルの屋敷を構えた。

長屋門は江戸時代、式台や玄関と同じく一定の格式をもった家に建てられたもので、家相図には南向きに位置しているが、現在は東向きとなっている。



図1-6-26 中村家住宅長屋門

¹ いくつかの断層が重なり、複雑な地層が見られる場所。

②有形民俗文化財

ア.秋葉街道貴布祢の道標

信仰の道の十字路(笠井～宮口を結ぶ道と秋葉道の交差点)に立っている。石製の角柱で、台座を含めた高さは約190センチメートル。四つの面に文字が刻まれ、東面「すぐ秋葉山道」、西面「左 秋葉山道 是よ里七里」、南面「左 しみや口大平道 観音講中」、北面「右 者ま松 左 可さ井池田 道」という道案内がされている。

建立年号の記載は無いが、刻まれている文字の内容から江戸時代後期のものと考えられている。



図1-6-27 秋葉街道貴布祢の道標

③無形民俗文化財

ア.遠州大念仏

遠州地方広域で行われている先祖供養の念仏踊。浜松南部では、元亀3年(1572) 三方ヶ原の戦いの戦死者の霊を鎮めるために始められたともいわれている。

初盆を迎えた家から依頼されると、30人を越す団体が行列を組み、その家を訪れて庭先で大念仏を演じる。

江戸時代のもっとも盛んなときには、約280の村々で大念仏が行われていた。



図1-6-28 遠州大念仏

④史跡

ア.浜松城跡

徳川家康は元亀元年(1570)に浜松(引間城)に入り、遠江経営の拠点として城郭の整備に着手した。現在残る浜松城の天守台や天守曲輪周辺の石垣は、天正18年(1590)、家康関東移封後に配置された豊臣秀吉家臣・堀尾吉晴による。近年、家康在城期の壕跡なども見つかっている。



図1-6-29 浜松城跡

イ.姫街道の松並木

東海道の脇街道である本坂通は、通称「姫街道」と呼ばれ、現在は約3キロメートルにわたり240本あまりのクロマツとアカマツの並木が続いている。

延宝年間(1680年ごろ)に作成された「浜松領分絵図」には、すでに松並木が描かれており、昭和初期ごろの写真には、うっそうとした松並木の様子が見える。



図1-6-30 姫街道の松並木

(5)未指定の文化財

市内には、指定文化財以外に未指定の文化財が多数ある。

浜松市では、平成 28 年度から「浜松地域遺産」認定制度を導入し、地域や団体からの推薦で埋もれた文化財を毎年認定している。

令和 4 年度までの 7 年間で、659 件の未指定文化財を認定することができた。市内ではまだ選定されていない伝統的建造物群や文化的景観を認定しているほか、伝承地や伝統的生活文化など、幅広く認定をすることで、地域が未指定文化財を再認識するようながしている。

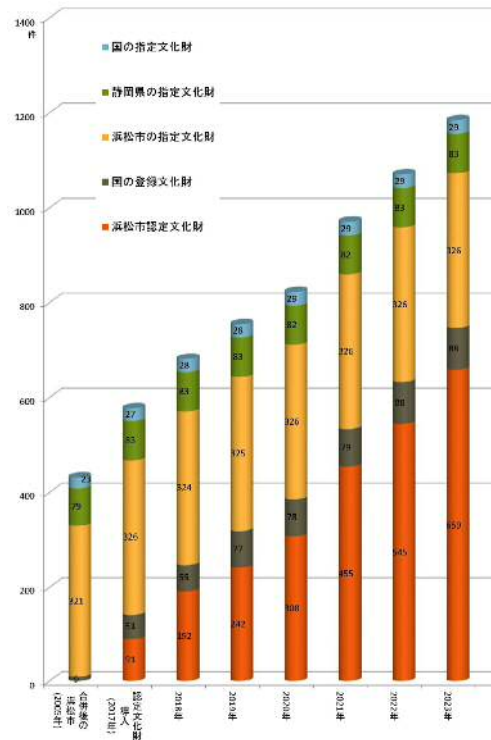


図1-6-31 指定文化財等件数の増加

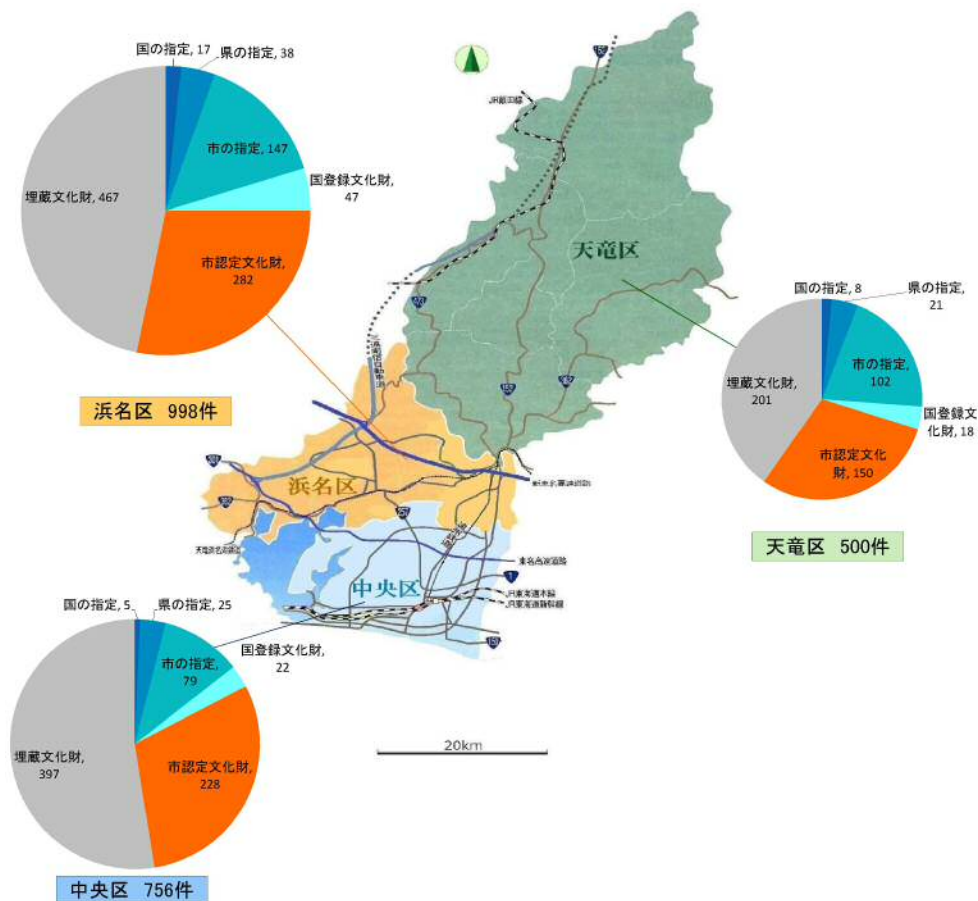


図1-6-32 浜松市内各区分別文化財件数

(6)特産品、工芸品、菓子・料理など

①特産品

市内には、農業、林業、水産業に関わる特産品が多数ある。代表的なものを以下に示す。

表1-6-2 特産品




名称	特徴
	<p>マスクメロンのうちでも、静岡県産は香りがよく、皮近くまで食べられるのが特徴である。 メロン全体では静岡県シェアは低いが、高級品の温室メロンでは全国一の収穫量を誇っている。県内では袋井が最大の産地となっているが、浜松市でも栽培が盛んに行われている。</p>
	<p>次郎柿は弘化年間(1844～1847)に太田川沿い(周智郡森町)の松本治郎が育てたのが始まりとされる。浜松市浜名区では、明治中ごろから大平(おいだいら)地区に導入され、昭和初期に足立静六が商品化に成功し、本格栽培に取り組んだ。その後、同区赤佐・中瀬地区へと産地が拡大し、旧浜北区北部一帯が次郎柿の産地となった。</p>
	<p>特別栽培米である「やら米か」は平成 20 年(2008)3月に浜松市商工会議所から浜松地域ブランドに認定され、7月には静岡県から中小企業地域資源活用促進法に基づく地域資源に指定された。遠州人の積極性を示す方言「やらまいか」にちなんでいる。</p>
	<p>浜名湖うなぎは養殖うなぎの代名詞となり、全国的にブランドを確立している。かつては全国生産の4分の3を占めていた静岡県産うなぎは、昭和 57 年(1982)を境にトップの座を退き、現在は安い輸入品増加の影響で、浜名湖の養殖は業者、生産量とも減少傾向にある。しかし、安心・安全な品質と味の良さは着実にファンを定着させている。</p>
	<p>浜松市はすっぽん養殖の発祥の地である。浜名湖畔に養鱈場を創設したのは、110 年余前のこと。気候が温暖で、養殖池を造成することが可能な遊休地があり、東京と大阪の中間地点で鉄道も整備され経済的利便性が高かったなどの理由から適地として選定された。</p>
	<p>シラスとはマイワシ・カタクチイワシの稚魚のことである。舞阪漁港では、遠州灘でのシラス漁が盛んに行われ、その漁獲量と操業規模は全国有数である。シラス漁は毎年3月 21 日から解禁となり、翌年1月 14 日までが漁期となる。遠州灘特有の透明度が高いシラスは見た目も美しく、味と質を誇る。</p>
	<p>ドウマンガニ(ノゴリガザミ)は、房総半島以南からオーストラリア、インド洋西部まで広く分布しており、古くから浜名湖の特産品となっている。全国でも商業的漁獲対象となっている地域は浜名湖のほか、高知県浦戸湾と沖縄県八重山諸島に限られている。</p>
	<p>浜名湖南部の遠浅の砂地に多く生息している。海水と真水が混ざる汽水湖ならではの味わいがあるアサリに育つという。甘みと旨みのある柔らかい身が殻いっぱい詰まっている浜名湖産の天然あさりは、春から夏にかけて獲ることができる。</p>

	カキ	浜名湖のカキ養殖は、明治20年ごろ、浜名湖に鉄橋を架ける際に組まれた蛇籠(じゃかご)や石の間に天然のカキが育っているのを発見した舞阪町の田中万吉が、鉄橋近くの水深の浅い湖底に砂利を敷き並べて養蠣(ようれい)場を作り、そこに幼いカキを置く地蒔(ぢまき)式という方法で養殖を始めたのが始まり。
	遠州灘天然とらふぐ	とらふぐは東シナ海から日本近海にかけて分布しているが、近年、遠州灘から熊野灘にかけての水域も好漁場として注目を浴びている。現在、国内で流通しているとらふぐの9割が養殖もので、天然ものはわずか1割しかない。その天然もののうち、約6割がこの水域で漁獲されていると言われている。秋から冬にかけて漁がおこなわれている。
	浜名湖のり	文政3年(1820)、信州の商人森田屋彦之丞が舞坂宿角屋甚三郎方に投宿のおり、武州大森(現在の東京都大田区)で当時盛んに行われていた浅海に粗朶をさして養殖する方法と製造の仕方を甚三郎へ伝授したことが始まりである。浜名湖のりの養殖場は浜名湖の湖南部に広がっている。鮮やかな緑色と特有の強い磯の香りが特徴である。
	三方原馬鈴薯	三方原台地を中心に赤土の土壌で栽培されている馬鈴薯のことで、赤土と日本トップクラスの日照時間が、でんぷん質が高くホクホク感のある馬鈴薯を育てている。
	三ヶ日みかん	静岡県ではみかんは江戸時代に岡部町に植えられ、続いて三ヶ日で栽培されるようになったといわれる。三ヶ日みかんは、三ヶ日町平山地区に住む山田弥右衛門が紀州の那智地方から苗木を持ち帰った(紀州みかん)のが始まりである。それを庭に植えたところとても甘かったので、苗木を造ったのが、次第に三ヶ日全体に広間った。
	白たまねぎ	温暖な気候と水はけのよい砂地を持つ中央区篠原地区で育てられた「白たまねぎ」は、日本一早く出荷(1月ごろ)することで有名になり、首都圏などでも高い評価を受けている。別名「サラダオニオン」とも呼ばれる、このたまねぎは、一般的なたまねぎと比べるとやや扁平で色が白っぽいという特徴がある。
	ガーベラ	ガーベラは花びらが大きく華やかで、種類は数千種もあり、比較的安価でさまざまな色合いを持つため、フラワーアレンジメント向きで人気がある。日本のガーベラの1/3が静岡県で生産されており、その内の6割が浜松市で栽培されている。
	天竜材 (杉・ひのき)	浜松市天竜区で育てられた木材を「天竜材」という。江戸時代から人工造林が行われていたが、明治年間に金原明善が治水事業として本格的に植林事業を始めたのが起源である。温暖で雪害が少なく、育林に適した気候で、木々は根曲がり少なく、まっすぐで節も少なく、成長するので、目幅(年輪の幅)が詰まった粘り強い木に育つ。
	浜松のお茶	天竜川中流域の春野、天竜、佐久間など各地でお茶が生産されている。多くは山間部のお茶でいわゆる普通煎茶である。三方原台地など市南部でも茶園が広がるが、こちらは日照がよく、深蒸し茶として製品になることが多い。また、佐久間では炒り茶の一種であるぐり茶が生産される。紅茶やウーロン茶も含め、浜松市ではさまざまなお茶が楽しめる。

②工芸品

市内の工芸品に関する代表的なものを以下に示す。




表1-6-3 工芸品

名称	特徴
 <p>ざざんざ織</p>	昭和3年(1928)、民芸運動に深く共鳴した平松実が、自ら民芸運動の一翼をになって工芸的織物の創作をはじめ、「ざざんざ織」を完成させた。いわゆる紬(つむぎ)の織物である。古く当地に有名な松があり、足利義教將軍がその松の下に宴を催したおり、「浜松の音はざざんざ…」と詠んだ。潮風に冴え千古の緑を連想させ、永久に変わりなく人々にその美しさと安らぎを与えるような松にあやかって、平松はこの名を命名した。
 <p>浜松注染そめ</p>	ゆかたの生産は、江戸期以来の伝統を有する東京と大阪が中心であったが、大正12年(1923)の関東大震災を機に、首都圏から新天地を求めた職人たちが、水が豊富に流れ、強い風が吹き、染め物の生産に適した静岡県西部に流入しはじめ、注染技法による「浴衣染め」が普及し、一大生産地となった。注染そのものの技法は、現代にまで忠実に受け継がれ今日に至っている。
 <p>遠州織物</p>	遠州地方は、日本有数の綿織物産地の一つとして知られる。江戸時代に入ると、綿花を栽培する農家が自給自足で始めた手機による綿織物が市場に出回るようになり、これが「遠州木綿」として高い評価を得た。その後、明治期の洋式紡績の導入、小幅力織機の発明などで、綿織物の生産量は飛躍的に増加し、全国有数の産地として遠州の繊維業が確立した。

③菓子・調理など

市内の菓子・調理などの代表的なものを以下に示す。

表1-6-4 菓子・調理など

名称	特徴
 <p>浜松餃子</p>	焼き餃子が日本で作られるようになったのは、第二次世界大戦後の復員者が水餃子を焼いて食べたことからと言われていたが、浜松では戦前から中華料理屋などで焼き餃子を提供する店があったことが分かっている。浜松餃子も戦後の屋台販売から広まり、具の野菜の多さ、フライパンで焼いた円形の盛り付けと、中央のもやしが特色とされる。
 <p>みそまん</p>	その原点は浜名区引佐、細江、三ヶ日。引佐町奥山は奥山半僧坊方広寺の町。お供えや法事の引き出物はどの家もみそまん。寺の和尚の都合を聞く前に「みそまんは作れるか」とまんじゅう屋の都合を聞いてから法事の日を決めていたとも言われる。黒糖などを混ぜた生地でこしあんを包んで蒸しあげているが、できあがりは店ごとに異なる。
 <p>大福寺納豆 (浜名納豆)</p>	大福寺(浜名区三ヶ日町)で製造される唐納豆(乾燥納豆)。かつては近隣の摩訶耶寺、長楽寺などでも生産され、現在も市内の寺院や商店で生産される浜松の名産。納豆に山椒などをまぶして味付けされている。浜名納豆とも呼び、徳川家康も珍重した。江戸ではこれに見立てた菓子で、「甘名納糖」が発売されるようになった。

第 1 章

浜松市の歴史的風致形成の背景